



HARUKI NOVELS

# 監獄女医

地下牢の囚人

二条 睦



かん ごく じょ い  
**監獄女医**  
地下牢の囚人

に

3-1

著者  
に じょうむつみ  
**二条 睦**

2000年6月8日第一刷発行

発行者——— 角川春樹

発行所——— 株式会社角川春樹事務所  
〒101-0051東京都千代田区神田神保町3-27二葉第1ビル

電話——— 03(3263)5247(編集)  
03(3263)5881(営業)

印刷・製本——— 中央精版印刷 株式会社

フォーマット——— 芦澤泰偉  
デザイン

シンボルマーク——— 西口司郎

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。定価はカバーに表示してあります。  
落丁・乱丁はお取り替えいたします。

ISBN4-89456-256-1 C0293

©2000 Mursumi Nijō Printed in Japan



HARUKI NOVELS

# 監獄女医

地下牢の囚人

二条 睦



# 監獄女医

地下牢の囚人

二条 睦

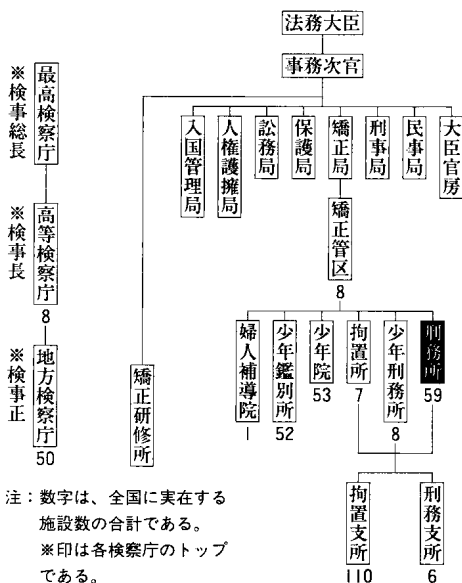
角川春樹事務所



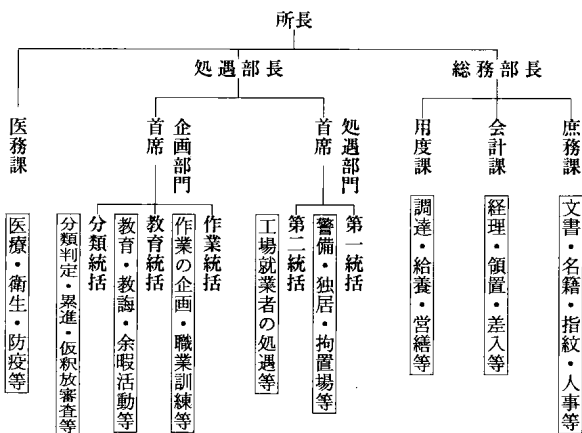
# 目次

|         |     |          |     |
|---------|-----|----------|-----|
| プロローグ   | 9   | 初公判      | 145 |
| 監獄女医の誕生 | 12  | C型肝炎     | 157 |
| 女医と看護師  | 28  | 殺人者の女    | 172 |
| 地下牢の囚人  | 43  | 証人尋問     | 181 |
| 刑務所幹部   | 61  | 身分帳      | 191 |
| 刑務所長    | 72  | カンバスの謎   | 203 |
| 殺人者の母   | 83  | サディスト殺人鬼 | 214 |
| 女医の恋人   | 94  | 法務省矯正局   | 231 |
| 囚人総理    | 113 | 甲府地検     | 243 |
| 辣腕弁護士   | 122 | Xデー      | 254 |
| 弁護士面会   | 133 | エピソード    | 274 |

### 法務省の機構図(抜粋)



## 刑務所の組織と所管事項



# 監獄女医

地下牢の囚人



## プロローグ

二月十日、午前十一時過ぎ、富士見ヶ丘刑務所保安本部は、けたたましい非常ベルに揺れた。

「医務課、医務課だ！」

非常ベル報知盤を見た看守がランプの点灯箇所を叫んだ。

保安本部とは目と鼻の先、二十メートルほどの間隔をおいた隣の棟で非常事態が発生したのだ。保安本部と待機室から看守が飛び出し走った。一呼吸遅れて食堂で昼食を食べていた看守が続いた。

二日と空けず<sup>あ</sup>に鳴る非常ベルはその大半が囚人同士の喧嘩である。誰の頭にも受刑者が殴<sup>なぐ</sup>り合い、掴<sup>つか</sup>み合っている図が描かれていたはずだ。

「どこだ！」

診察待合室にも、治療室にも囚人の姿はなかった。「どこだ、どこだ？ 間違いか？」

医務課事務室、薬剤室も空<sup>から</sup>である。

振動と物が砕<sup>くだ</sup>ける音、続いて悲鳴と怒声が弾<sup>はじ</sup>けるように響いた。

「奥だ！」

「課長室だ！」

スチール製のロッカーと書庫が倒されバリケードに使われている。ドアが開かない。

数名の看守が力を合わせて押し開く。

驚愕<sup>きょうがく</sup>の聲が一瞬の内にかき消された。

信じられない光景があった。

一人の受刑者が医務課長の襟首<sup>えりくび</sup>を掴<sup>つか</sup>み、デスクの上に俯<sup>うつ</sup>せに押さえ付けている。しかも、わずかに引いただけでも頸動脈<sup>けいどうみゃく</sup>を切断しそうな鋭利な革切り包丁を首に押し当てているのだ。

「所長を呼べ！」

受刑者の声は薄気味悪い程、落ち着いている。

「お前、久保くぼじゃないか!? 何血迷つとるのか、久保……落ち着け! 久保!」

一人の看守が、人波を押し分け最前列に出た。

第三工場担当看守・森聡もりさとしである。

「担当さんには、本当に申し訳ないと思っております。覚悟の上なんです。所長を呼んで下さい。お願いします。呼んでくれなければ、こいつを殺します」

「久保、馬鹿なことを言うな。話せば分かる。お前を待っている人のことを思わんか!」

職員食堂で昼の定食を食べていた森は、非常ベルで走った。しかし、自分が受け持つ受刑者が事件を起こしているとは微塵みじんも思わなかった。

久保光男みつおは第三工場で革張りの応接セット用のソファファを作っている。特に問題がある受刑者ではなかった。むしろ、行状ぎょうじょうも作業成績も優秀だった。

医務課長の右腕はへし折られたように、不自然にぶら下がっている。

気を失っているのだろう。

緊急事態きんきゅうじたいの発生は所長室に電光石火でんこうせっかの如く届とどいた。

「なんだと!」

富士見ヶ丘刑務所長・小黒豊おぐろとよいちは顔色を変えた。

「わしを呼んで何をしようというのだ……」

激しい動揺どうように全身を震ふるわせている。

処遇部長が駆け込んで来た。

「所長! お願いします」

「犯人の要求は絶対に飲めん。人質事件の鉄則てつそくだろう」

「しかし所長、人質をとられていたんじゃ、ガス銃うも撃うてません」

処遇部長・影山昭かげやまあきらは所長に説得してもらいたいと思

っている。久保の態度は一時の感情でも激情でもない。所長が久保の話を聞く以外に解決策はないと判断して庁舎二階の所長室に駆け上かがって来たのだ。

「拳銃けんじうを使え!」

「拳銃? 拳銃ですか!」

「そうだ、武器庫に眠かっているだろう。三十八口径こうけい

が……」

小黒は自ら人質の解放のために現場に赴おもむこうという気持ちきもちは全くないようだ。

日本の刑務所では、一九六〇年以降、拳銃は使われたことがない。携帯けいたいさえしていない。

拳銃があることも忘れている者がほとんどの時代に、小黒は人質の救出に拳銃の使用を指示したのだ。拳銃を発射して久保を射殺したとしても、法律の要件ようけんに合致した合法的な武器の使用であり問題はないだろう。

影山は、受話器を取ると大声で指示をした。

「所長の指示だ。拳銃を用意しろ！」

しかし、拳銃使用者の人選をしている間に、事態は最悪の終結を迎えていた。

医務課長・前田直次まえだなおつぐは頸部けいぶを切られたのである。

覚悟を決めての行動だけに、久保は誰の説得にも応じなかった。

多数の看守の目前で、予告もなく久保の手が動い

た。凶器きようきは強く深くゆっくりと前田の頸部を押して引いた。突然裂けたホースから飛散する水道水のよ  
うに血が噴き出した。

## 監獄女医の誕生

市街地を少し南に下った住宅街のはずれに、富士見ヶ丘刑務所はある。明治の半ばなかに建てられた時は田畑の真ん中だったという。

刑務所は建て替えられて二十年、六百人の男子受刑者と百人の被告人を収容している。

三百メートル四方の敷地内には南北二百五十メートル、東西二百メートル、高さ五・五メートルのコンクリート塀で囲まれた長方形の収容区域があり、東側には庁舎、北側に官舎が並んでいる。

職員数は定員二百三十名のところ現在二百二十九名、欠員の一名は医務課長である。

「所長、国立医科大学付属病院の医局で派遣先の病院もいくつか当たってもらったんですが、内科医は

今のところいないようです。外科医はどうかという話があるんですが」

人事担当の庶務課長・桐野操きりのみさおが大学付属病院、医師会、総合病院などを回り、内科医の派遣を要請していた。

「いつまでも、医者を不在にしておく訳にはいかんだろう。総合病院の外科医なら、なんでも出来るはずだ。刑務所には合っているかも知れん」

「はあ、ただ、男じゃないんです……」

「女医か？」

「はい……」

富士見ヶ丘刑務所長・小黒豊一は椅子いすを九十度回転させて、窓に目を向けた。

「若い女医です。しかし……」

「なんだね」

「刑務所にはおよそ不似合いな美人。そう、囚人には刺激的なほどの美人です」

「ふうむ……」

小黒は一瞬、相好を崩しかけたが口を堅く結んだ。

「庶務課長、面接してみるか」

「来てもらいますか？」

「ああ、中も見せてやろう。刑務所がどんなものか知ってもらったほうがいいに決まっている。まあ、他にも希望者がいたら一緒に計画してくれんか」

「しかし、事件のことはどうしますか？」

「どうするとは、どういうことだ」

「前任の医師の不幸は、どこにも漏れていませんが時間の問題でしょう。少なくとも久保の裁判が始まれば、マスコミは興味を示します。刑務所にも、後任の医者にも取材がある可能性があります」

「そうかも知れんな」

救急車を呼べば警察に通報され、マスコミが飛んで来る。役所の護送車で搬送しろ！という、小黒の指示によって、瀕死の医師は刑務所のワンボックスカーで医科大学付属病院に運ばれた。

病院に到着した時には既に死亡していたのだが、

病院関係者からも刑務所内で起こった殺人事件は、どこにも漏れなかった。

「所長、後任の医者は若い独身の美人女医……、しかも彼女は事件について何も知らされていない。動機もはっきり分からない監獄医殺人事件！ マスコミは大事件を隠された腹癒せにスクランダラスな視点で嗅ぎ回るでしょう……」

「うむ……。そこは桐野君。君に任せるよ」

「分かりました。説明してみます。面接の件は、お忙しそうでなんとも言えませんが、当たってみましょう」

小黒は桐野が退室するのを見届けると、席を立つた。絨毯を敷き詰めた所長室を徘徊する。

「桐野の奴！」

苦悩にも似た険しい表情で呟くと富士山が望める窓辺に行んだ。

部課長ら幹部の中では、桐野だけが小黒にずけずけものを言う。

一國一城の主であり、人事にも絶大な力を持つ刑務所長は表面上は部下に平伏され、忠誠を誓われる。コメツキバッタのようにペコペコする部課長が多く、それが当たり前と思っていた小黒だけに、桐野が忌ま忌ましくて仕方がなかった。

桐野は、本来、所長の秘書役でもある庶務課長のポストに在りながら、へりくだった態度を取った事がないのだ。

「恐れ入りますが、車の乗り入れは出来ませんので……」

表門勤務の看守が真っ白い手袋を嵌めた手を小さく振りながら、運転席の傍らに歩み寄って来た。

「外来の方はその駐車場にお願いします」

「お早うございます。私は今日からこちらの医務課長になる若宮です……」

「医務課長さん？……。大変失礼しました。お早うございます」

姿勢を正し敬礼をした看守は二十四、五歳だろうか、紺の制服がよく似合う長身の青年である。

正門は刑務所の顔、選ばれた職員なのだろう。

「若宮先生ですね。車の番号を控えさせて下さい。これからは失礼がないようにいたしますので……」

「お願いします」

「庁舎の裏が職員の駐車場です。白線が引かれ番号が書かれています。駐車場所の指定はされておりませんので、空いているところにお止め下さい」

「ありがとう」

看守は上着のポケットから取り出した手帳にナンバーと車種をメモすると、通用口から小走りに門扉の内側に回った。

門が引かれる。

今日から三月とはいえ、看守の吐く息は白い。鉄扉は冷たいだろうな。冴子は刑務所の一員になったことを実感しながらゆっくり車を走らせた。

若宮冴子初登庁の日、最初の関門はさわやかであ

る。

「若宮先生、セレモニーですから、難しい事は言わないで下さい」

庶務課長の桐野操は宣誓書を差し出した。

「宣誓ですか？」

「国家公務員の採用には宣誓させることになっているものですから、よその省庁は知りませんが、刑務所は厳格にやっていますので……。所長の前で読んで下さい。お願いいたします」

「『私は、国民全体の奉仕者として公共の利益のために勤務すべき責務を深く自覚し、日本国憲法を遵守し、並びに法令及び上司の職務上の命令に従い、不偏不党かつ公正に職務の遂行に当たることをかたく誓います』……か」

慣れない文章である。これが公務員の世界の文書か。冴子はなんとなく肌の合わないきまり悪さを感じた。

桐野は冴子の心を見透かしたように、「先生、セ

レモニーですからね」と念を押した。

冴子は一週間前にも桐野と会っていた。仕事の内容の説明と刑務所見学の誘いに病院を訪ねて来たのだ。

結局、日程の調整がつかずに刑務所見学は実現しなかったのだが、一日も早く来て欲しいと窮状を聞いただけで冴子が決心するには十分だった。

「若宮さん、よく来てくれましたね。こんなに早く来ていただけるとは……」

刑務所長・小黒豊一は、満面の笑顔で冴子を迎えた。

左右の後方には総務部長と処遇部長が立ち従っている。

「形式的なことは、女医さんにはふさわしくないから止めましょう」

小黒は冴子の美貌にすっかり悩殺されていたのだろう。桐野はかつて見たこともない小黒のはにかみと緊張が入り交じった笑顔を前にしておかしくなっ